



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1997 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## 光が世にあらわれた

兄弟姉妹の皆さん。

本日の祝日で、教会は傷を受けた人類と共に苦し

みながらも、世界に「神の恩寵が現われた」こと、「救い主なる神の慈しみと人間への愛が現われた」こと(テイト2・11、3・4参照)を心の中で喜びます。ペトレヘムでのひそかなイエズスの誕生は、真理、正義、平和、自由を求める全ての人を導く新しい光となりました。そこには人種や文化、社会条件の違いはありません。教会は、マリアのように心に喜びをおぼえます。東の国の博士たちがペトレヘムにやって来て、幼子の前にひれ伏してあげ、黄金と没薬と乳香を献上し

た時(マテオ2・11)、マリアは嬉しかったことでしょう。御母は神の愛が全ての人を引きつけるのを知って、感謝に満たされました。

今日、教会は聖霊によって喜び踊ります。聖霊は御父と御子からの贈り物であり、教会の生命と使命を豊かなものにするあらゆる賜物の源です。特に今朝、聖ペトロ大聖堂で聖別を受けた十名の新司教の誕生を喜びます。教会の二つの活動、すなわち人々から中心であるキリストへ、またキリストから地の果てまで全ての人々に及ぶ交わりと宣教は、司教団においてはずきりと現われます。

兄弟姉妹の皆さん、新しく叙

階を受けた司教たちのためにお祈りください。彼らが福音の寛大で聖なる働き手となり、言葉と模範で神の民を導くことができますように。

東方教会もまた、喜び踊ります。古代のカレンダーに従い、東方教会は明日、主の誕生を祝います。私たちの兄弟としての思いが東のキリスト信者の兄弟姉妹たち全員に届きますように。私も心から挨拶を送ると共に、紀元二千年を目前にして、主から託された賜物・務め、すなわち一致を、祈りと対話のうちに倦まずたゆまず深められるよう祈ります。

今日、教会は福音の呼びかけを新たにします。「神に立ち返れ、地上の全ての国よ。キリスト・イエズスに立ち返れ。」神の憐れみと忠実、キリストのうち完全に表わされています。神を忘れ、神に逆らうなら、救いも正義もありえませ

ら、救いも正義もありえませ

●10・24 教皇さまは南スーダンのカトリック者にメッセージを送り、「教皇はあなたたちのそばにいる」と力づけられた。

●11・7 教皇庁大学の関係者に向かい、教授と学生、および他の協力者の信仰における一致の大切さを説かれた。

●同日、修道女たちに「神の優しさのしるし」となるようお話しになった。

●11・11 イタリアの司教たちに「文化とマス・メディアの分野でキリスト教のより効果的で具体的な働き」を要請された。

●11・16 巡礼者に「愛こそ

### 教皇さまの動き

新たな福音宣教のパン種である」と話された。

●11・20 一般謁見の時のカテケーシスで聖母についてのお話を続ける。「聖母は極貧の中で御子を生み、ゆりかごのかわりに飼葉桶に横たえた：へいとも尊き御子」の尊厳とはいかにも対照的です。」

●同日、ザイル難民のため安全保障を訴えるアピール。

●11・24 王であるキリストの祝日、三名の神のしもべの列福式を挙行した時の

お話。「キリストは愛の王ですから、人々とこの世に対する審判も、どれだけ愛したかに基づいて行なわれます。」

(IIコリント8・9参照)となりましょう。

御父の知恵をひざに抱いておられたナザレトのマリア、この招き、信じる人々と全ての善意の人に届きますように。マリアの母親らしい取り次ぎによって、教会と世界に一致と平和の賜物がもたらされますように。(九五・一・六、ご公現の祝日に。聖ペトロ広場にて)

# 役務としての司祭職 と女性

教会シリーズ 39

**1** 女性はいろいろな方法、とりわけ母性を通して信者の共通司祭職に参与します。(教会憲章10番参照) 霊的母性だけでなく、多くの女性が自然な役割として運び取る妊娠、出産、育児、つまり「子供が世に生まれる」ことにおいて参与します。この仕事は教会の中で崇高な召し出しを含む役務であり、女性はそれを果たすことにより、信者の共通司祭職という使命にあずかります。

**2** 最近、カトリック信者の中にも、女性が司祭になることを求める動きがあります。しかしそれは容認できません。司祭職は社会的な基準や法的手続きに基づいてではなく、キリストの意志に完全に従う職務として理解すべきものです。イエズスは司祭職を男性だけに委ねました。何人かの女性にはついてくるよう招き、協力を望みましたが、教会の司祭職を任されたグループに加わることは、要求も許可もされませんでした。イエズスの意志はその行動全体にも、キリスト教の伝

統が従うべき指針として伝える重要なわざにおけるのと同様に、見て取ることができません。教会はいつの時代もキリストの意志に従う

**3** イエズスは女性を宣教に送らなかつたことを福音は伝えていきます。(ルカ9・1〜6参照) 送られた十二人の弟子はみな男性でしたし、七十二人の弟子についても、中に女性がいたとは記されていません。(同10・1〜20参照)

イエズスは十二人に御国の権能を授けました。「父が私のために王国を備えられたように、私もまたあなたたちのために王国を備えよう。」(同22・29) 司祭職で一番大切な、イエズスの名によって聖体を記念する使命と権能を十二人だけに与えました。(22・19参照) 復活の後、罪を赦し(ヨハネ20・22)、全世界に福音を説く権能を弟子たちのみ与えました。(マテオ28・18〜20、マルコ16・16〜18参照) キリストの意志は使徒たちと

初期共同体の指導者たちに引き継がれました。初期共同体によってキリスト教の伝統は築かれ、以後も教会に生き続けています。最近の書簡「司祭の叙階について」(九四年五月)でこの伝統を確認することが私の務めであると思ひ、次のように記しました。「教会は女性に司祭の叙階を授ける権限を持ちません。このことは教会の全ての信者に支持されなければなりません。」(4番) キリストが制定された通りの司祭職であるかどうかが問題なのです。ピオ十二世は言明しています。「秘跡の本質、つまり主キリストが秘跡のしるしの中に刻むよう望まれたいかなるものにも、教会は権限を持たない。」つまり教会は「主が司祭の叙階を男性にのみ与えられた」ことを規範として受け入れなければなりません。(IAS 40[1948], p.5)

**4** 男性にのみこれをお与えになったことには永久的で重要な意味があります。当時の物の考え方や女性に対する偏見によるものではありません。イエズスは決して女性に好意的でない考え方に従つたのではなく、むしろ性の違いによる不平等に反対したのでした。女性を招くことによつて、当時の社会の習慣や見解を超えることを示

しました。司祭職を男性のためを取つておいたのは、完全に自由な選択によるものでした。女性を排除する立場を取つたわけではありません。

**5** イエズスが司祭職を男性に委ねた理由を探すなら、教会との関係において司祭はキリストの代理者になるという事実に見い出すことができます。この関係は本質的に結婚の関係です。キリストは花婿で、(マテオ9・15、ヨハネ3・29、IIコリント11・2、エフエ5・25参照) 教会は花嫁です。(IIコリント11・2、エフエ5・25〜27、31〜32、黙示録19・7、21・9参照) キリストと教会の関係がはつきりと叙階の秘跡に表われているので、キリストは男性によつて代表されなければならないこととなります。性の違いはこの場合とても重要です。軽視すれば、秘跡を汚すことになるでしょう。事実、使用されるしるしの特質は秘跡のかなめです。洗礼は水を注ぐことによつて行なわれます。水よりも高価ですが、塗油の油では行なわれません。同様に、人間一人ひとりの価値とは関係なく、叙階の秘跡は男性が対象となります。すなわち、公会議が教えるように、司祭は教会のかしらであるキリス

トのベルソナにおいて行動できるように(司祭の役務と生活に関する教令2番) 司祭キリストの姿に似たものとなり、委託された権限内において、かしらであり牧者であるキリストの任務を遂行します。(同6番)

**6** 女性との真の進歩は、男性とは異なつた人格として、男性と同様に、人間の模範と呼ばれるにふさわしい者になることによつて得られるものです。イエズスは、男性との間にある自然の相違にそつた固有の使命を女性に与えることをお望みでした。この使命を履行することによつて、女性の人格発展の道が開かれ、女性の特質に合つた形で人類と教会に奉仕することができま

**7** 結局、イエズスは司祭職を女性に委ねなかつたことと、女性を劣つた位置に置くことも、女性が当然持つべき権利を奪うことも、男女の平等を侵害することはありませんでした。むしろ女性の尊厳を認め、尊重しました。司祭職を委ねることで男性を優位に置いたのでなく、「人の子」になつた

つつましい奉仕へと招いたのでした。(マルコ10・45、マテオ20・28参照) イエズスは、女性にふさわしい役目を女性に委ねることによってその尊厳を高め、教会における女性独自の権利を証明しました。

マリアの内に  
女性の役割を見よう

8 イエズスの母マリアの模範を見れば、教会の中で委ねられた使命を果たす女性の尊厳がいかに尊いものであるか、はつきりとわかります。

マリアは役務としての司祭職には呼ばれませんでした。受けた使命は司牧の役務に劣ってはいませんでした。事実、それははるかにすぐれた使命でした。マリアは最も高いレベルで、イエズス・キリストの母、神の母(ギリシャ語でテオトコス)になるといふ、母としての使命を受けたのです。この使命は恩寵によって全人類に対する母性へと広がりました。

多くの女性が教会で受けている母性という使命についても同様です。(「女性の尊厳と使命」27番参照) キリストによって、女性は教会と創造の頂きで輝くマリアの素晴らしい光に包まれています。

(九四・七・二七)

「聖なる日が明けそめた。諸国の人よ、来て主をあがめよ。今日、大いなる光が地を照らした。」クリスマススの典礼の言葉が今も心に響き、主の誕生の喜びに招かれます。ある意味で今日もクリスマススの喜びの続きです。イエズス自身、ご自分の到来の意味を思い起こさせています。「私は命を、豊かな命を与えるために来た。」(ヨハネ10・10) 人の地上での旅路に新たな

東方教会の靈性は  
心を大切に

人間中心の文化には、現代の多くの男女を神から離れさせる傾向がなくありません。しかし強大なイデオロギーがふるわなくなつた今、人は「神を失う」と、自らの生命の意味を見失い、ある意味で自分自身を「失う」ことが劇的に明らかになりました。

人間とは何か? 東西二つの伝統を持つキリスト教は、常にこの問いかけを真剣に取り上げてきました。そうして生まれたのが、人間の究極の真実は人間を造られた御方のうちに見い出されるという原則に基づき、深く

見通しを与える、豊かで終わることのない命です。今日、クリスマスを念頭にお

福音の証し人になろう

(聖ステファノの殉教記念日)

いて、最初の殉教者聖ステファノを思い起こします。すでにキリストの死と復活という過越し

の秘義に照らされたいです。が、ステファノの生涯はクリスマス深い意味について考える機会を与えてくれます。後に続く信者たちの模範となつた最初の殉教者の姿は、神の言葉に無条件の忠実を保ち、寛大に兄弟姉妹のため自己を捧げる時、はじめて完全に真実の生き方ができるのだと確信して、妥協せず福音の価値を証するよう、私た

言う「心」とは、人間の一機能(たとえば感情のような)をはるかに超えたものです。それはむしろ人格を統合する原則、一種の「内なる宇宙」であり、人はそこで自分を取り戻し、主を知り、愛するようになります。東方の著者たちはこの原則を示して「頭から心に降りよ」と招いています。物事について知ったり考えたりするだけでは十分ではありません。知識が生活そのものになることが必要です。これは宗教経験の分野のみならず、人間の生活全体に関わる重大なメッセージです。今日広く受け入れられている科学文化は、膨大な量の情報を私たちにもたらしました。しかし、真の人間化を進める上で、それだけでは不十分であることが、日々明らかです。私たちは以前にも

ちを励ましてくれます。

特に今日なお、困難な状況の中でキリストへの信仰と愛を証するよう召されている人々のために、聖ステファノの取り次ぎを願います。ステファノと共に至聖なるマリアも、様々な状況にあつて言葉と行ないで生命の主・救い主の喜ばしい知らせを全ての人のもとに届ける私たちを助けてくださいますように。

(九五・十二・二六)

増して「心」の次元を再発見する必要に迫られています。心が必要なのです。東と西それぞれの豊かさを誇るキリスト教的視点との新たな出会い、ここでたいへん貴重な貢献をもたらしてくれることでしょう。

兄弟姉妹の皆さん。至聖なるマリアの導きにより、さらに深い自己発見ができるようお願いしましょう。生涯の様々な出来事について深く考え続けたマリアの態度を強調して、福音はマリアが「これらの記憶をみな心におさめておいた」(ルカ2・51)と述べています。

神の御母よ、存在の内なる深みに向かう道、私たちを迎え、愛してくださる神と親しく話すことのできる、神秘的な聖域に達する道をお教えください。

(九六・九・二九)

# 信徒の霊性が 教会を新たにする

バチカン公会議を振り返る 9

十二月八日、無原罪の御宿りの祝日に、私たちは第二バチカン公会議の閉幕三〇周年を迎えました。ご存じのようこの公会議は信徒とは何か、信徒の使命とは何かということを中心に、大きなテーマとしました。これについて公会議の教父たちは「信徒使徒職に関する教令」で系統立てて述べています。

「教会憲章」では、信徒と呼ばれるキリスト信者は在俗的特性を持ち、世俗の仕事に携わることが強調されています。(31番参照) それに加えて「現代世界憲章」は地上の諸現実の価値と自律性を明言し、創造主である神と託身したみことばへの信仰は決してまことの在俗的特性を曲げることはなく、かえってそれを強化することを示しました。もちろん、この価値と自律性は創造主の計画に沿うものとして理解しなければなりません。「創造主なくしては被造物は消え失せる」(現代世界憲章36番)のですから。

公会議文書「信徒使徒職に関する教令」は、信徒

の使徒としての召命というテーマに焦点を当てています。そこで、信徒の召命は、この世の秩序(7番)にキリスト教の精神を吹き込むため働くことのみならず、むしろ自分のおかれた状態に合ったやり方での「福音の宣教と聖化の使徒職」(6番)そのものへと信徒を促していることと述べられています。

信徒の使命の第一番目は、日常の生活の中で、家庭で、職業生活で、文化や芸術、経済、政治活動でたえず福音を証し続けること、これでしょう。しかし、厳密な意味での教会生活にも、信徒の加わるべき広大な分野が待っています。聖職者の数が足りない共同体をどう支援するかという問題にとどまりません。信徒も洗礼によって聖化されたのですから、権利と義務の主体となって特別な役割や奉仕職を引き受け、一人ひとりの持つ霊的賜物やカリスマを神の御国のために役立てなければなりません。

今世紀、特に公会議後の二〇年間、数々の信徒グループの

活躍が顕著でした。洗礼を受けた人ひとりひとりの英雄的な証しによって信仰がめざましい勢いで広がる事ができたのは、神の霊がキリストの民の間に宣教への情熱をかき立てたおかげだと言えそうです。

首尾一貫した十分な形成を受けた信徒の寄与によって、真の「信徒の霊性」が広まることによつて、紀元二千年の教会に新たな春の訪れを期待することができるといえます。

私たちの希望を、至聖なるマリアの取り次ぎに委ねましょう。今、私の心は本日から七百年祭を祝うロレットの聖家族の家に向かいます。祝された処女マリアはその家で生涯の大部分を過ごし、驚くべき使命を成し遂げ、「すべての人と同じように家庭の世話と仕事に追われながら」(信徒使徒職に関する教令4番)生活を送られました。ナザレトの家が、私たちの家庭にとつて生きた信仰と恐れを知らぬ希望の模範となるよう、聖なるマリアに願いたいと思います。キリスト者の家庭と信徒の皆さんが、神の愛のパン種をもって世界を変え、そうして愛の文明を築く方法を聖母から学び取ることができましよう。

(九五・十二・十)

## 小さき者に信仰の賜を!

(聖ペトロ大聖堂で主の洗礼の祝日のミサを行なった教皇さまは、ミサ中に各国から集まって来た子供たちに洗礼をお授けになりました。)

★「喜びに心はずませ、救いの泉から水を汲む。」(答唱詩篇、イザヤ12・3参照) イエズスの洗礼の祝日に、当たり、ローマの教会は今日、両親に抱かれて(イザヤ60・4を思わせるような光景です)キリスト教入信の秘跡と共にイエズス・キリストが十字架上で血を流して獲得してくださった新しい生命を受けるためにやってきました子供たちを喜び迎えます。

私も皆さんを心からお迎えします。ご両親と代父母の皆さん、喜ばしくも、今日はこの幼い子供たちに最も美しく、大切な贈り物、すなわち世界と全人類の救い主・キリストへの信仰を授けることになりました。皆さんの喜びは全教会の大きな喜びでもあります。教会はキリストの洗礼を記念してヨルダン川の岸辺を訪れ、あの神秘的な出

来事を目のあたりにします。託身したみことばが、洗礼者ヨハネから洗礼をお望みになっているのです。この行為によつて、聖性と正義に満ちた御方は、偉大な預言者の呼びかけに答えて改心し痛悔した大勢の人々の一人となられました。ヨルダン川に入ったイエズスは、私たち罪人の味方となってくださったのです。

しかし、真の洗礼は聖霊による(マルコ1・8参照)ものです。それはイエズスがご自分の死と復活によつて定められました。この洗礼では、水に入る代わりに、罪の赦しとキリストにおける永遠の生命を効果的に示すしるしが行なわれます。今日、洗礼を受けるといふことは、キリストと共に死に、生きる神・御父と御子と聖霊の生命に人間が生まれ変わることであると私たちは知っています。

★(ローマ6・11参照) 兄弟姉妹の皆さん。キリスト信者の家族のこの喜ばしい祝日に集まった皆さんは、間違いなく信仰に導かれて

います。皆さんはイエズスが救い主、キリスト、人類を贖う方であること知っておられます。まことの神の子である主は私たちのため、人間の子供たちのために、世に打ち勝つ信仰の勝利を手に入れてくださいました。

(イヨハネ5・4参照)

さて、ご両親の皆さんは生まれたばかりの子供たちのためにこのすばらしい信仰の勝利を望んでおられます。キリストは聖なる洗礼の秘跡という形で、それを皆さんにお与えになります。「霊によって生まれねばならない。」(ヨハネ3・5参照)水と霊によって生まれ変わらなければなりません。この霊的生まれ変わりは、私たちを神の生命にあずからせ、永遠の生命への始まりとなる洗礼の秘跡を通して起こります。

子供たちを

キリスト信者として育てる



祈りのうちにここに集う皆さん、降誕節の終わりに当たり、典礼は特別な「霊的収穫」について黙想するよう、呼びかけています。霊魂は畑です。教会が語る神の言葉によって豊かな大地となり、永遠の生命のための実を結ぶよう呼ばれています。そうです！復活したキリストの御力で、神の言葉は

必ず実を結びます。秘跡的なしるしを行なうことによつて神の救いのわざが実現されます。

(イザヤ55・10、11)

そうです。ご両親の皆さん、神は全ての人の対するのと同じように、皆さんの子供たちのためにもこの救いを願っておられます。天の御父は「豊かな命を与える」(ヨハネ10・10参照)ことをお望みです。お父さん、お母さん、地上でのご両親の皆さん、あなたたちは子供たちを世に送ることです。神の協力者となつておられますが、神はさらなる協力を求めて、皆さんが子供たちにキリスト者としての教育を与え、救いをもたらすみことばを支援してください。ことを願っておられます。また代父母の皆さんにも、子供たちを教育する両親の支えとなつて神に協力してください。望んでおられます。

い。そうすれば、子供たちは皆さんからキリストを知り、愛し、まことの生命の道をキリストに従って歩むことを学ぼうでしょう。



今日、教会は洗礼を受けこの子供たちのために喜び祝います。子供たちはローマや世界の各国からやつて来て、神の偉いなる家族の一員になろうとしています。教会共同体が個々の家庭：「小さな家族教会」という細胞から成る普遍の家族であることを、今日の聖体祭儀は体験させてくれます。

「あなたはこの愛する子である。私はあなたを喜びとする。」(マルコ1・11)皆さん、今日、子供たちは神の「喜び」となり、一人ひとりが神の独り子の似姿であることが明らかに示されます。

(…)人間生命と超自然の生命のすばらしさを見出せるのは家庭の中においてなのです。子供たちが洗礼によって受けた新しい生命を育て上げることこそ、両親の第一の役目です。

「あなたは私の愛する子である。私はあなたを喜びとする。」(マルコ1・11)皆さん、今日、子供たちは神の「喜び」となり、一人ひとりが神の独り子の似姿であることが明らかに示されます。

## 聖母と悪魔の対決

聖母マリアと教会 シリーズ8

1 東方教会の教えによれば六世紀以来、「恩寵に満ちた」という表現はマリアが生涯を通じて享受した比類のない聖性を指すとされています。

聖伝と教導職は、お告げの場面を伝えるルカの記述に加えて原福音(創世3・15)の中に、聖書に基づく聖母の無原罪の御宿りという真理の源を見ました。昔のラテン語版によれば「彼女はお前の頭を打ち砕くで

あろう」…この一文は、無原罪の聖母を描いた多くの作品のインスピレーションとなつてきました。足の下に蛇を踏みつける姿です。

この表現はヘブライ語本文とは一致しません。その女自身ではなく、女の末、つまり子孫が蛇を踏み潰すからです。ヘブライ語版では、サタンに対する勝利はマリアではなく御子に帰せられていきます。とは言え、聖書

では、親と子の深いつながりという考え方が不動のものとしていられるのですから、蛇を踏みつける無原罪の聖母の姿も、マリア自身の力と言うより御子の恩寵によつてではあります。本文のこの意味に忠実であると考えられます。

マリアは悪魔に対抗する力を与えられた

## 2

聖書の同じ文章は、女とその子孫、蛇とその子孫との間に敵対があることを明らかにしました。これは神が置かれた敵意であることは明白です。聖処女の個人的聖性について考える場合、このことは独自の重要性を持っています。蛇や

# 不変の教え

その子孫との徹底対決を計るためには、マリアは生を受けた瞬間から、全ての罪の力をまぬがれている必要があるのです。

この点に関して、無原罪の御宿りの教義制定百年を記念したピオ十二世の一九五三年の回勅「フルジェンス・コローナ」は次のように説いています。「もし、祝された処女マリアが懐胎された時、罪の遺産によって汚されたために一瞬でも神の恩寵を失ったことがあったとしたら、いくら短かいとは言え少なくともその期間中、マリアと蛇との間に、無原罪の宿りの定義にまでさかのぼる最古の承伝が伝える永遠の敵対はなかったはずです。それどころか、むしろある種の隷属が生じていたことでしょう。」(AAS 45 (1953), 579)

女と悪魔との間に置かれた絶対的な敵対が実現するためには、このようにマリアの無原罪の宿り(生命の始まった瞬間から全く罪を知らない)が必要で、サタンに決定的勝利をおさめたマリアの御子は、御母を罪から遠ざけることによって、あらかじめこの恩恵をこうむらせることができました。結果として御子は悪魔に対抗する力を聖母に授け、こうして無原罪の御宿りという秘義には、御子の贖

いのわざの中でも最も顕著な効能が加わったのです。

**3** 全く比類のないマリアの聖性、そしてサタンの影響力から完全にまぬがれていたことに注目しましょう。「恩寵に満ちた方」という称号と原福音の記述は、神がマリアに与えられた比類ない特典の内に、神との友情の結果生じ、従って蛇と人間との深い敵対を伴う新しい秩序が始まったことを教えてくれます。

「太陽に包まれた婦人」について述べる黙示録の第12章は、無原罪の御宿りを証明する聖書の箇所として、よく引用されます。(12・1参照)最近の研究も、この婦人が苦しみの中に復活したメシアを生む神の民の共同体であるとする見方を支持しています。こうした集団的な解釈に加えて、本文は個別的な解釈をも示唆しています。「婦人は男の子を生んだ。この子はすべての異邦人を鉄のつえで牧するはずの者であつて。」(12・5)子供の誕生について述べるくだりで、太陽に包まれた婦人はメシアを生んだ女性、マリアであると考えられています。共同体を表わす婦人は、実のところイエズスの母である婦人の特徴を帯びて描かれています。

「この婦人は身ごもって、陣痛の悩みと苦しみの叫びをあげていた。」(12・2)この文は十字架のもとでのイエズスの御母を示しています。(ヨハネ19・25参照)御母は剣で心を刺し貫かれ(ルカ2・35参照)、弟子たちの共同体を生む苦しみを共にしました。その苦しみにも拘わらず、婦人は「太陽に包まれ」て神の輝かしさを反映し、神と民との婚姻関係を表わす「大いなるしるし」となっています。

これらのイメージは直接に無原罪の特権を指し示すものではありませんが、マリアをキリストの恩寵と聖霊の輝きで包む御父の愛に満ちた計らいの表われであると考えられます。

黙示録はマリアの人格の中に教会的な次元を認めるよう勧めます。太陽に包まれた婦人は、比類のない恩寵によって聖なる処女に体現された、教会の聖性を表わしています。

**4** 無原罪の御宿りの教義を確立するため、聖伝と教導職が述べるこれら聖書の箇所は、罪の普遍性を主張する聖書本文とは矛盾しているように見えます。旧約聖書は「女から生まれた」(詩篇50(51)・7、ヨブ14・2)全ての人を汚す罪の伝

達について述べています。新約聖書では、パウロがこう語ります。アダムの罪の結果として、「全ての人が罪を犯し」、「一人の罪によって有罪の判決が全ての人に及んだ。」(ローマ5・12、18)「カトリック教会のカテキズム」にあるように原罪は「人間の本性を傷つけ」、「墮落した状態にした。」こうして罪は「全人類に繁殖によって伝わった、すなわちもともと聖性と義を奪われたままの人間本性が伝達された。」(404番)しかしパウロは、この普遍の法則に例外を許しています。

キリストは「罪を知らなかつた」(IIコリント5・21)ゆえに「罪が増したところに」(ローマ5・20)それ以上の恩寵をもたらすことができたのです。

「マリアは新しいエバである」このように言ったからとて、必ずしもマリアが罪深い人類の一員であると結論されるわけはありません。パウロが見出したアダムとキリストとの間の並行関係は、エバとマリアの間にも当てはまります。女性は罪のドラマにおいて重要な役割を演じましたが、同じく人類の贖いにおいても重要な役目を果たしています。聖イレネウスはマリアを新し

いエバと呼びました。マリアの信仰と従順は、エバの不信仰と不従順を償ったからです。救いのドラマでこのような役割を果たすためには罪を免れていなければなりません。新しいアダムであるキリストと同様、新しいエバであるマリアも罪を知らず、それゆえ贖いのわざに協力することができたのです。

洪水のように人間を押し流してしまふ罪の力は、贖い主とその忠実な協力者の前にせき止められました。二人には本質的な違いがありません。キリストの人間性は神のペルソナに由来するので、全く聖なるものです。マリアは救い主の功績によって受けた恩寵のおかげで、全く聖なる者なのです。(九六・五・二九)

## 「教皇様の声」購読者募集中!

- 年間購読随時お申込み受付中。
- お友達・お知り合いの方にも見本紙をお送りします。お気軽にお申し付けください。

年間購読料(送料共)	
1部	2,050円
2部	3,360円
3部	4,680円
4部以上	1部1,490円×部数
7部以上	1部1,440円×部数
バックナンバー	1部180円

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのままと伝える月刊紙。毎月10日発行。定価 一部百八十円(送料とも) 一年予約 送料とも一〇五〇円から。詳しくは精選教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393